

音吉たち漂流民の、日本への帰国は鎖国政策、キリシタン禁制で不可能だとわかりました。



ギユツラフ『約翰(ヨハネ)福音之傳』  
堅夏書院 シンガポール 1837頃






マカオで、ドイツ人宣教師で、語学の天才ともいべきギユツラフ (1803-1851) の下で、音吉たちは聖書の日本語訳に協力しました。一言一言、聖書の言葉の意味を噛みしめながら、若かった音吉はキリスト教を深く理解し、ギユツラフの家族や、英米人と交際を深め、成長していきました。愛する家族、故郷をなくした音吉にとって、神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。(ゴクラク セカイノニンゲソヲ タシカニカワイガル シトリムスコヲ トラシタ:音吉訳) 独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハ 3:16) という

聖書の言葉にどれほど驚いたことでしょう。この原本を明治学院大学図書館のアーカイブス <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/search/book.php?id=1837johgutz2> で読むことができます。日本では出版されず、流通しませんでした。彼らは懸命に努力し、「言葉」を「カシコイモノ」、「神」を「ゴクラク」等、カタカナで表示しています。

マカオや上海で、アヘン戦争とそれに次ぐ戦乱を見て、中国の疲弊していく様子を目撃した音吉はシンガポールを永住の地として移り住みました。日本が世界に目を向けて、他国と平和に共存できる国になってほしい、開国し、異文化から学び、豊かな国になってほしいという音吉の願い、気持ちに寄り添ったのが、シンガポールの地勢、風土、文化だったと思います。もともとマレー人の住むところでしたが、海運、貿易に好都合と判断した華僑が移り住み、やがてイギリスの植民地となり、インド方面からも労働力が入りました。シンガポールは、それぞれの民族と共に、イスラム教、ヒンズー教、仏教、道教、キリスト教が入ってクロス・カルチュラルになりました。

シンガポールは当時イギリスの植民地でしたから、イギリス国教会がキリスト教界では有力だったでしょうが、音吉はギユツラフやギユツラフ夫人の感化を受けて、オランダ改革派の聖書理解や、妻の出身地であったスコットランドの船員たちによって 1822 年頃創立され、最初の礼拝が 1857 年に行われた小規模の Orchard Road Presbyterian Church に晩年まで出席したと言われています。地上ではよそ者ではあっても天の故郷を熱望していた(ヘブライ 11:13)、律儀で誠実な心優しい音吉なのだ改めて大好きになってしまいました。

シンガポールは初代の大統領リー・クワンユーの政治的手腕で、「国民の自由・平和・進歩・平等・正義」を実現する共和国として成長してきたのです。すべての民族はそれぞれの宗教に生き、平等に暮らすことが、真の平和への道となるのです。キリスト者となった音吉も、これを日本に願ったと思います。街を歩くと、多民族の国民と海外からの観光客とすれ違い、実にインターナショナルです。様々な寺院、教会が立っていて、南アジアでは珍しい国だと思いました。

仏牙寺	聖アンドリュース大聖堂	サルタンモスク	シアンホッケン寺院	スリ・マリアマン寺院
				
仏教 人口比 33.2%	キリスト教 18.8%	イスラム教 14.0%	道教 他 10.0%	ヒンズー教 5.0%